

イエス・キリストの昇天

預言者エリヤが天に上げられたとき、後継者エリシャは、エリヤの力の二倍の分を願いました。それを受けるための条件は注目に値します。エリヤが天に上げられるのをエリシャが見るなら、そのときにだけ、その分け前を受けるといいます。ですからエリシャは、その昇天の瞬間を見逃すまいと、全神経を集中していました。彼はそれを見逃さず、感動的な場面の証人となりました（列王第二2:9～14）。

今日でも、主の昇天を見逃さないことは、それと同じくらい大切なのかもしれません。もちろん、昇天はとうの昔に起こったことであり、もはや見逃しようがありません。けれども、イエスの昇天の意味が強調されることはめったにありません。昇天は、十字架や復活と同じように、救いの歴史の中で重要な位置を占めているのです。

栄光のうちに上げられた

キリストという人格において私たちに開かれた敬虔の奥義、信仰の土台には、この方が栄光のうちに上げられたということが含まれています。

確かに偉大なのは、この敬虔の奥義です。「神は肉において現れ、霊において義とされ、御使いたちに見られ、諸国の民の間で宣べ伝えられ、世界中で信じられ、栄光のうちに上げられた。」 テモテへの手紙第一 3章16節

栄光が、この方の上って行かれた場所であったというだけではありません。天への入場全体が栄光に包まれていました。神の栄光の雲がこの方を受け入れ、天への入場に付き添ったのです。

この方は雲の中に上げられました。

こう言ってから、イエスは使徒たちが見ている間に上げられた。そして雲がイエスを包み、彼らの目には見えなくなった。使徒の働き 1章9節

主のこの昇天は、エリヤの昇天に劣らず感動的なものだったと私は思います。いのちをかけてご自分の使命を果たされた御父の御子が、今、天に入り、戴冠のために上って行き、父なる神に迎えられます。この方の昇天とともに、即位が始まります。さげすまれたナザレ人イエスが、その直後に主とされ、キリストとされます。この方は今、御父の御座に着かれます。神の御子である一人の人間が、最初の人間として天に、神の王座の間に足を踏み入れ、父が息子に与えることのできるあらゆる栄誉と熱狂と賛嘆をもって迎えられ、歓迎されるのです。天はこの比類のない場面の証人です。イエスが、ご自分が出て来られた天の御国へと帰還されるのです（ヨハネ 3:13、6:62）。御子が再び家に帰って来られ、こう言われます。

わたしは、行うようにとあなたが与えてくださったわざを成し遂げて、地上であなたの栄光を現しました。父よ、今、あなたご自身が御前でわたしの栄光を現してください。世界が始まる前に、みそばで持っていたあの栄光を。ヨハネの福音書 17章4～5節

すでにその前にも、イエスがこう言われるのを私たちは聞きます。

ユダが出て行ったとき、イエスは言われた。「今、人の子は栄光を受け、神も人の子によって栄光をお受けになりました。神が人の子によって栄光をお受けになったのなら、神も、ご自身で人の子に栄光を与えてくださいます。しかも、すぐに与えてくださいます。」ヨハネの福音書 13章31～32節

昇天は、ペンテコステの10日前、復活の40日後に起こりましたが、この方が栄光を受けられることと密接に結びついています。私たちは、私たちの先駆けとしての主が天に迎えられるときの、天の喜びを心に思い描いてよいのです。

勝利と凱旋

昇天は、この方の凱旋の証しです。戦いは終わり、勝利は得られました。そして天はこの方を取り戻したいと願っています。

主イエスは彼らに語った後、天に上げられ、神の右の座に着かれた。マルコの福音書 16章19節

キリストは天に上り、神の右の座におられます。御使いたち、また諸権威と諸権力は、キリストに服従しているのです。ペテロの手紙第一 3章22節

この下られた方ご自身が、すべてのものを満たすために、もろもろの天よりも高く上られた方なのです。エペソ人への手紙 4章10節

この方の復活がすでに、成し遂げられた贖いの証しであったとすれば、宇宙で最も高い栄誉の座に着かれたことによって、神のキリストが神のあらゆる要求を満たし、いや、それを超えるほどに果たされたことが、決定的に確証されたのです。この方は自ら進んで下り、私たちのように生き、他の人々のために罪人の死を死に、地の低い所にまで下られました。

みことばは、この方の下降と上昇について繰り返し語っています。神のご計画を成就するためには、この無限の隔たり、この限りない低さが必要でした。そして、それに続くこの方の高挙も同じように限りなく、どんな人間もかつて到達し得なかったほどに高く、崇高なものです。そして息をのむようなことに、この方がこれほどまでにご自分を低くされたからこそ、私たちのために天を開いてくださるのです。この方はただ道を開いてくださっただけではありません。私たちはこの方にあって、今すでにそこへとともに移されているのです。

御座におけるこの方の地位の栄誉は、その深い低さを感じ取るときに初めて推し量ることができます。

すべてのものを満たすために！ まるで天のあらゆる片隅にこの方の御名が読み取れるかのようです。すべてがこの方によって刻印され、満たされているのです！

ですから、イスラエルの全家は、このことをはっきりと知らなければなりません。神が今や主ともキリストともされたこのイエスを、あなたがたは十字架につけたのです。使徒の働き 2章36節

このみことばもまた、この方の昇天と栄光の救済史的な次元を明らかにしています。この方の栄光の及ぶ範囲は、全世界に影響を及ぼします。イスラエルの家は神の救いの独占権を失い、全世界が主キリスト、神の油注がれた方を知ることができるようになるのです。

贖いは成し遂げられた！

もちろん、贖いはすでに復活において神によって確証されています。しかしここでは、終わることのない旧い契約のいけにえと奉仕を背景として、この方のささげ物と、その血の価値とが、ただ一度限りのものであり、永遠に有効であることが、この方が天の聖所に入られたことと直接に結びつけられています。

また、雄やぎと子牛の血を携えて{または「によって」}ではなく、ご自分の血を携えて{または「によって」}、ただ一度だけ聖所に入り、永遠の贖いを成し遂げられたのです。ヘブル人への手紙 9章12節

ゴルゴタでこの方はご自分の血、すなわちご自分のいのちをささげ、霊的な意味でその血を携えて至聖所に入られました。けれども、このみことばで大切なのは、この方がただ一度だけそこに入り、大祭司のように再び出て来ることはなかったこと、そして神の右に座られたということです。贖いの「務め」は成し遂げられ、キリストは御座に着いておられるのです。

この方こそ、永遠の救いの創始者、創造者です。誰がこのような息をのむような主張をすることができますでしょうか。誰が、このようなことを成し遂げたと言ったことができるでしょうか。

完全な者とされ、ご自分に従うすべての人にとって、永遠の救いの源となり、神によって、メルキゼデクの位に等しい大祭司として迎えられた{または「呼ばれた」}のです。ヘブル人への手紙 5章9節

そう言えるのは、神が迎え、ご自分の聖所に歓迎し、ご自分の御座に、すなわち存在する最も高い場所に座らせた方だけです。なんという歓迎でしょう！ 御子が33年を経て帰って来られるのです！ そしてこの方は「メルキゼデクの位に等しい大祭司」という栄誉の称号を受けられるのです！

御父の呼びかけには、このことばが含まれています。「あなたは、わたしの右に座していなさい。わたしがあなたの敵をあなたの足台とするまで。」詩篇 110篇1節

もしこの方が神からこのように迎えられなかったとしたら、永遠の、揺るぎない贖いが成し遂げられたと言えるでしょうか。

天でのとりなし——地上での救い！

この方はもろもろの天を通して行かれました。それがこの方の昇天であり、この方が大祭司の務めに就くための前提です。この方は凱進行進のうちに、すべての御使いたちに見られながら上って行かれました。

さて、私たちには、もろもろの天を通られた、神の子イエスという偉大な大祭司がおられるのですから、信仰の告白を堅く保とうではありませんか。私たちの大祭司は、私たちの弱さに同情できない方ではありません。罪は犯されませんでした。すべての点において、私たちと同じように試みにあわれたのです。ですから私たちは、あわれみを受け、また恵みをいただいて、折にかなった助けを受けるために、大胆に恵みの御座に近づこうではありませんか。ヘブル人への手紙 4章14～16節

この方は、私たちがしばしばそうするように、ただ傍観しておられるわけではありません。そうではなく、私たちが栄光へと至る狭い道で諦めてしまわないように、私たちのために神に祈り、願ってくださるのです。

したがってイエスは、ご自分によって神に近づく人々を完全に救うことがおできになります。いつも生きていて、彼らのためにとりなしをしておられるからです。{または「彼らの代わりに立つため、彼らのために願うため」}ヘブル人への手紙 7章25節

神の御霊——生ける水、助け主、いと高き所からの力

神の御霊がペンテコステに地上に遣わされるための条件は、天に上って栄光を受けられたキリストでした！

わたしを信じる者は、聖書が言っているとおり、その人の心の奥底から、生ける水の川が流れ出るようになります。イエスは、ご自分を信じる者が受けることになる御霊について、こう言われたのである。イエスはまだ栄光を受けておられなかったのも、御霊はまだ下っていなかったのもである。ヨハネの福音書 7章38～39節

神の御霊は、栄光を受けられたキリストについて証しし、目標へと向かう私たちの道のりにおいて、この栄光を私たちにとって生き生きとしたものにするはずでした。その道のりは、外から見る限り、キリストのこの栄光——この方が私たちと分かち合おうとしておられ、今すでに私たちの所有となっている栄光——を何一つ認めることも、予感させることもありません。この意味で、私たちは「いと高き所からの力」と言うこともできます。それは、いと高き所にある栄光の真髄であり、その働きなのです。

私たちの主が今や栄光の主であり、私たちがまさにこの栄光へと向かう途上にあるということ——これはまことに私たちの奥義です。この方は、成し遂げられたみわざのゆえに御父から与えられたご自分の栄光を、私たちに見せたいと願っておられます。

ペンテコステにこの御霊が来られ、弟子たちにとっていと高き所からの力となりました。けれども、まさにこの御霊によって、この日が神の教会の誕生の時となったことは、誰もが知っています。

ですから、神の右に上げられたイエスが、約束された聖霊を御父から受けて、今あなたがたが見聞きしている聖霊を注いでくださったのです。ダビデが天に上ったわけではありません。彼自

身こう言っています。「主は、私の主に言われた。あなたは、わたしの右に座していなさい。わたしがあなたの敵をあなたの足台とするまで。」〔詩篇110:1〕使徒の働き 2章33～35節

この日、すべての弟子たちが一つの御霊を飲み、天におられるかしら（頭）と結ばれました。かしらとからだは、キリストと教会の親密で切り離すことのできない結びつきを表す、象徴であり現実です。そして、かしらとなるべきなのは栄光を受けられたキリスト、すべてのものをすべてのもので満たす方にほかなりませんでした。まだ地上におられた、昇天前の復活のキリストではなく、未来をご自分のものとし、この栄光を永遠に教会と分かち合おうとしておられる方です。かしらとからだは切り離せないで、この方は、教会がともにいないところには、もはやどこにもおられないのです。

イエスが自分たちのもとを去ることは、弟子たちを悲しませたに違いありません。けれども主は、彼らに、そして新約聖書全体を通して私たちにも、ご自分が帰って行くことがどれほど大切で、どうしても必要であるかを明らかにされます。その空白の中に神の御霊が入り、彼らを満たし、彼らのうちに住まわれるのです。この方は、キリストの御霊とも呼ばれるこの御霊のうちに、再び来られるのです。

しかし今、わたしは、わたしを遣わされた方のもとに行こうとしています。けれども、あなたがたのうちだれも、『どこに行くのですか』と尋ねません。かえって、わたしがこれらのことをあなたがたに話したため、あなたがたの心は悲しみでいっぱいになっています。しかし、わたしは真実を言います。わたしが去って行くことは、あなたがたの益になるのです。去って行かなければ、助け主はあなたがたのところに来ません。でも、行けば、わたしはあなたがたのところに助け主を遣わします。ヨハネの福音書 16章5～7節

この方が私たちの到着を準備してくださる！

昇天は、私たちの希望とも直接に関わっています。この方は、ご自分がいつも御父とともにおられたその場所に、私たちのための住まいを整えるために、行かなければならないのです。この方は、その場所を私たちにふさわしいものとするために、自ら心を配ってくださいます。それはいったい何を意味するのでしょうか。この方は私たちにこれほど良くしてくださろうとしているのに、何が私たちを待っているのか、私たちには見当もつかないのです！

わたしの父の家には住む所がたくさんあります。そうでなかったら、あなたがたのために場所を用意しに行く、と言ったでしょうか。わたしが行って、あなたがたに場所を用意したら、また来て、あなたがたをわたしのもとに迎えます。わたしがいるところに、あなたがたもいるようにするためです。ヨハネの福音書 14章2～3節

『わたしは去って行くが、あなたがたのところに戻って来る』とわたしが言ったのを、あなたがたは聞きました。わたしを愛しているなら、わたしが父のもとに行くことを喜ぶはずです。

〔わたしの〕父はわたしよりも偉大な方だからです。ヨハネの福音書 14章28節

救い主はここで、ご自分の心の内を見せてくださいます。この方は家に帰りたかったのです！この方はこの世ではくつろいでおられませんでした。寄留者であり、ご自分の使命に集中するし

もべでした。けれどもこの方は、ご自分の家が私たちの家にもなることを望まれたのです。

ですから私たちは、地上ではなく、この方のもとでわが家になるようになります。かつて地上の者であった私たちは、たとえ時々そのような思いが忍び寄って来ようとしても、きっとほとんど何も恋しく思わないでしょう。

イエスは私たちの先駆けとして先に急いで行かれ、今は聖所におられます。聖所とは、もちろん別の観点からですが、御父の家と同じ場所を表しています。

私たちが持っているこの希望は、たましいのために安全で確かな錨であり、また幕の内側にまで入って行くものです。イエスは私たちのために先駆けとしてそこに入り、メルキゼデクの位に等しい、とこしえの大祭司となりました。ヘブル人への手紙 6章19～20節

先駆けには後に続く者たちがいます。それが私たちです。この方は信仰の創始者であり、完成者です。私たちは、この方がもろもろの天を通して行かれたのと同じ道を通して、この方に従って行くのです。住まいの備えと同じように、私たちの「お迎え」についても、この方が自ら心を配ってくださいます。

この方は使命を残して行かれる！

それから、イエスは彼らに言われた。「全世界に出て行き、すべての造られた者に福音を宣べ伝えなさい。」マルコの福音書 16章15節

弟子たちとの別れの瞬間に語られた主のこのことばを引用しないとしたら、それは怠慢というものでしょう。使命ははっきりしています。それは、キリストの御顔にある神の栄光の福音です（コリント第二4:6）。それは永遠の救いの知らせであり、そのためにキリストは死に、よみがえり、天に上られました。そして神の御座にあるこの方の地位が、私たちに出て行く権威を与えてくれます。それは、十字架で終わった敗北者の知らせではありません。再び来られる勝利者、生きておられる方の知らせなのです！

この方は再び来られる！

ガリラヤの人たち、どうして天を見上げて立っているのですか。あなたがたを離れて天に上げられたこのイエスは、天に上って行くのをあなたがたが見たのと同じ有様で、またおいでになります。使徒の働き 1章11節

この方はオリーブ山に立たれます。

その日、主の足はエルサレムの東に面するオリーブ山の上に立つ。オリーブ山はその真ん中で二つに裂け、東西に延びる非常に大きな谷ができる。山の半分は北へ、残りの半分は南へ移る。ゼカリヤ書 14章4節

この方は今、御父の御座に着いておられます。そして、この方が来られるとき、ご自分の御座で治められます。その足もとには、この方の敵がみな横たわることになります（黙示録3:21）。

この方が今すでに持っておられる栄光が、太陽のように輝き出ます！

この方の昇天の日が確かにあったように、この方の再臨の日も確かに来ます！ これらすべてを、私たちはすぐ間近で体験することになるのです。ハレルヤ！